

2023年度

大学院文学研究科博士課程前期2年の課程入学試験

( 春期・一般選抜 ) 問題

外国語試験 日 本 語

試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけない。

|   |  |
|---|--|
| 成 |  |
| 績 |  |

2023年度

大学院文学研究科博士課程前期2年の課程入学試験

(春期・一般選抜) 問題

外国語 ( 日 本 語 )

1. 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

西洋近代の「自我」概念と日本人の精神的伝統における自我理解とのあいだにいに深い(1)相克が存するか、そしてそのことが日本人の精神生活や道徳心にとどのような運命を(2)担わせたかという問題に、正面から取り組もうとしたのが夏目漱石(一八六七―一九一六)であった。漱石の文学、評論、講演のなかで、自我論は少なからぬ部分を占めている。

漱石は、『私の個人主義』(大正三年十二月二十五日学藝雑誌に発表)において、「他人本位」ではない「自己本位」という、西洋から入ってきた概念を取り上げる。「此世に生れた以上何かしなければならん」。「其時確かに握った自己が主で、他は賓である」という信念は、今日の私に非常の自信と安心を与えて呉れました。

しかし、<sup>A</sup>「自己本位」は<sup>A</sup>思想的に受け取られるべきではない。漱石は、そのような自己を実現する自由が、同時に義務を(3)トモナしている点に注意を(4)喚起する。漱石は、自分が留学していた(一九〇〇―〇二)イギリス社会の事情を例にとり、彼の地においては、個人の自由と義務が、権利に義務がトモナしていると紹介する。そして、「自由」や「自己」という概念を、日本人がごく不完全にしか、あるいは自分勝手にしか輸入していないという偏向をただしている。結論として漱石は、個性を発展させるのは、ある程度の修養を積んだ人間にのみゆるまれることだと、<sup>B</sup>「人格の支配」を訴えるのである。

注目すべきは、漱石が、義務や他人の権利に<sup>B</sup>厚く無恥な日本人の「自我」受容に、はっきり言及している点である。「いくら人に賞められたって、元々人の借着をして威張っているのだから、内心は不安です。手もなく孔雀の羽根を身に着けて威張っているようなものですから」。「近頃自我とか自覚とか唱えていくら自分の勝手な真似をしても構わないという符徴に使つようですが、其中には甚だ怪しいのが沢山あります」。「それで私は何も英国を手本にするという意味ではないのですけれども、要するに義務心を持っていない自由は本当の自由ではないと考へます」。つまり日本人のあいだにそういう西洋の自我とは別の自我が根強く存在していると<sup>C</sup>示唆するのだ。漱石は、二つの異質な自我理解のあいだに、いわば<sup>C</sup>分裂状態にある近代日本人の深刻な状況を見てとっているのである。

そして漱石自身は、日本伝来の武士道や儒教の倫理を生来の成分の一部としながらも、西洋的な個人主義を、それからの近代社会の自我にとって必要なものと考え、積極的に自分のものとしようとする。しかし個人主義あるいは自己本位といつても、自然主義は採らない。自然主義が人間の弱さに着眼するあまり私生活の露出にはしり、時代の社会や倫理に対して無力無責任だと思われたからである。ゆえに漱石の個人主義は、現実根ざしながらも、なおある種の理想を志向してやまない道義主義の性格をもつ。

デカルトやカントが論じた自我は、自我の概念であり、それは知性によつて認識され得るものであり、形而上学の主題であった。しかし漱石の自我は、各個人の深い意識のなかで「体験」され、「検証」される。それは個人の自己を内側から超越する。そのことの体験こそ新しい時代の道徳性の根拠として、<sup>C</sup>漱石が期待しつつ構想したものだ。ただのだ。

問一 ― 傍線部(1)～(4)のカタカナは漢字に改め、漢字はその読みをひらがなで記せ。

(1)

(2)

(3)

(4)

問二 ☐ 空欄にあてはまる最も適切な語を、次の中から一つ選び○で囲め。

① 顔

② 眼

③ 面

④ 相

問三 ― 傍線部A「自己本位」は皮相的に受け取られるべきではない」とあるが、「自己本位」を「皮相的」に受け取る  
とはどういうことか。本文の内容に即して説明せよ。

問四 ― 二重傍線部「永峻」という語を用いて短文を作れ。

|        |  |
|--------|--|
| 受験記号番号 |  |
|--------|--|

問五 — 傍線部B「近代日本人の深刻な状況」とあるが、それはどのような状況をいうか。本文の内容に即して説明せよ。

問六 — 傍線部C「漱石が期待しつつ懺悔したものだったのだ」とあるが、漱石が近代日本社会に期待する「個人主義」とはどのようなものであったと考えられるか。「自我」ということばを使って、本文の内容に即して説明せよ。

1. 問1～2に答えよ。

問1 次の文中の空欄 ① ～ ⑩ に当てはまるひらがな一文字を入れよ。答えは文中の ( ) 内に直接記入せよ。

他人からどう見られているのが気になり、焦りと不安 ① ( ) 頭が一杯になった経験はないでしょうか。その不安はどこからともなく  
恐ろしがり、自分の内面に侵入してきます。頭からふり払い、追い払おうとして ② ( ) まったくできません。抵抗すればするほど、むしろ  
不安はどんどんふくれあがっていくのです。

私 ③ ( ) 若い頃、そんな状態 ④ ( ) 陥っていた時期がありました。誰かの視線が気になり、変 ⑤ ( ) 見られているんじゃないかと意識すればするほど、動悸は早くなり、汗 ⑥ ( ) にじみ出るのです。自意識過剰と言われればそれまでですが、自分でもどうしよう  
ありません。そんな自分 ⑦ ( ) 恥ずかしくて情けなく思える。さらに不安は大きくなります。自分の緊張、不安を周囲にまとい  
れまいと焦り、穴があいたら入りたい、この場から消えてしまいたい、そう感じてしまうのです。

いったいこの過剰な自意識は、なぜこれほどの苦しみ ⑧ ( ) もたらすのでしょうか。

「自意識過剰」というのは、文字通り「自分のことばかりに意識 ⑨ ( ) 向かう状態」であり、自分がどう見られているのか、という強い  
不安 ⑩ ( ) ともなっています。この不安は、自分が周囲の人たちに認められているのかどうか、受け入れられているのかどうか、とい  
った承認に関する不安です。そのため、絶えずまわりの人の顔色をうかがい、空気を読み、批判されないよう、注意深く気をつけているのです。

(山竹伸一『ひとはなぜ「認められたい」のか―承認不安を生きる知恵』(ちくま新書) による。7～8頁)

問一 次の文中の空欄 ① ～ ⑩ に当てはまる日本語表現を直接記入せよ。

世間一般では、「ポジティブ」であることがよいこととされている。ポジティブな生き方 ① ) に立ち向かうためのポジティブシンキング、ネガティブな思考を逐える方法など、このような内容の書籍、雑誌はたくさんある。特にネガティブな感情の代表ともいえる「後悔」は、「経験しないほうがよい」「そのような感情は早く解消したほうがよい」などのように ② ) ものとして扱われている。

しかし本当にそうなのだろうか。後悔は、私たちにネガティブな影響しか与えない感情なのだろうか。実は「後悔」という経験は、 ③ ) ことばかりではない。後悔した出来事を時折思い出すことは反省を促すだけでなく、「同じ ④ ) を繰り返してはいけぬ」という自分自身の戒めとして活用することもあるのである。「喉に哽ければ ⑤ ) を吐ける」といふことわざがある。辛いことを苦しいことでも時間が ⑥ ) には忘れてしまうこと ⑦ ) だ。後悔という不愉快な気持ちを吐けることはよいが、「後悔から ⑧ ) こと」を忘れてしまっている ⑨ ) はない。そのようにならないためには、後悔した出来事を時折思い出し、 ⑩ ) としたことを忘れないようにすることが重要である。そのすることによって、自分自身の行動をよりよい状態に保ち続けることができるのである。

(土市希雄『後悔を活かす心理学』(中公新書)による。いしは重)

## 三、次の文章を読んで、全体の要旨を二〇〇字以内で記せ。

私の娘がまだ小さかったころ、一緒に路線バスに乗ってよくお出かけしました。懐かしい思い出です。小さな子どもは、概して「(押し)ボタン」に興味を示すものです。当時の彼女も、多分に漏れず、バスの降車ボタンを押したがりでした。時には、実際には降りる必要のないバス停の前で降車ボタンを押してしまい、目的のバス停まで歩くはめになったこともあります。

なぜ、「ボタン」は、多くの子ども達の心を惹きつけるのでしょうか。携帯電話、コンピュータ、照明のスイッチ、テレビのリモコン等々、部屋の中を少し見渡しただけでも驚くほど沢山のボタンが存在します。一般に、ボタンはいろいろな装置や機械等の「状態」を変化させるためにあります。照明のスイッチの場合なら、ボタンを押すことによって照明が明るくなったり暗くなったり変化します。テレビのリモコンならテレビ画面が現れたり(オン)、消えたり(オフ)、画面が切り替わったりします。小さな子どもは、こうした「状態の変化」が楽しいのかもしれない。

実は、赤ちゃんもボタンが大好きです。私の研究室にいらっしゃるお母さんの情報によると、赤ちゃんにいたずらされて困っているものベスト3(ワースト3?)は、携帯電話、テレビのリモコン、ティッシュペーパーです。赤ちゃんのいる家庭では、知らない間に携帯電話が通話中になっていたり、ドラマのクライマックス・シーンをときどきしながら見ていると突然別の番組に切り替わっていたり、といったエピソードが少なからずあるはずです。ティッシュペーパーにはボタンがついていませんが、箱の中からティッシュペーパーがどんどん出てくる(何もない状態から柔らかな紙が沢山ある状態へ変化する)のが楽しいのかもしれない。

私たちは生きながらいろいろなことを経験しています。前述したように自分自身のボディ・イメージも経験によって獲得され精緻なものになっていきます。自己身体だけでなく、経験を通じてさまざまな行為も上手にできるようになります。

では、「上手にできるようになる」というのはいったいどういうことでしょうか。いくつかの側面を考えることができます。まず、行為の効率(スピードなど)が向上することが、「上手くなる」ことの一つの側面であると言えます。行為を実行するスピードが速くなれば、さまざまな作業に必要な時間を短縮することができます。もう一つの側面は、「正確さ」が向上することです。いくら一つ一つの動作が速くても間違えてばかりでは仕方ありません。さらに、もう一つの側面は、目的や状況に応じて適切な行動を行うことができることです。このためには、自らの行為とその変化に伴伴する状態変化との対応関係を経験によって獲得する必要があります。

最後の側面は、少し説明が必要でしょう。ここでは、テレビのリモコン操作を例にしましょう。私たちは難なくリモコンを使ってテレビを見ることができですが、最初にリモコンを使うときにはどう操作するのかが分からずに試行錯誤したに違いありません。外国のホテルに泊まったときなどは、このことを思い知らされます。日本製のリモコンとはデザインが異なっていて、チャンネルを変えるのにも一苦労です。

リモコンの操作が「上手にできる」ようになるためには、リモコン上の個々のボタンに対応する「状態変化」を知る必要があります。このためには、いろいろなボタンを押して、その後(テレビ)の状態がどう変化したのかを把握する必要があります。さらに、「目的」に応じて、行為を選択実行する必要があります。チャンネルを変えるにはこのボタン、音量を調節するには別のボタンというふうに、自分が欲する状態を実現するため必要なボタンを選択する必要があります。

